

論文

自己呈示としての謝罪言葉の実証的アプローチ

齊 藤 勇^{*1}
荻 野 七 重^{*2}

序 論

日本人は対人場面で謝罪する傾向が高いといわれている。確かに、日常生活においては、「すみません」「ごめんなさい」と謝罪の言葉が多用されている。しかし、このような言葉での謝罪が心からの、つまり内心からの謝罪をそのまま表しているとは限らない。日本人の謝罪言葉は確かに多いが、それは相手に対する印象操作のための自己呈示であり、内心では謝罪していないのかも知れない。日本の対人関係において謝罪言葉が必要以上に多用されているということは逆に表面上の謝罪であることを暗に示唆しているようにも思える。本研究では日本人の謝罪が印象操作のための自己呈示であることが多いということを投影法を応用し、内心と発言を区分した調査法を用いて調査することにより実証的に研究していくことを目的とする。

さて、謝罪は弁明の中の1つのタイプである (Schlenker, B. R. 1980)。弁明とは、マイナスの出来事が生じ、原因が自分にあり、その責任が自らに問われかねないような自分にとって不利な社会的、対人的状況において、その不利益を可能な限り少なくするように、できることなら不利益が無くなるように人や社会に対して主に言葉によって説明する言語的自己呈示である。弁明はいくつかの次元で分類されるが、その分類次元の一つが責任の受容と拒否である。この次元は、そのマイナスの出来事の生起に対して、基本的に自分が、起因者であり、責任があることを言明するか、あるいは基本的には自分には責任がないことを言明するかである。後者の責任否定の弁明には、否認、正当化、弁解の3種類がある。これら責任否定の3つの弁明の相違は、否定の力点の置き方が異なっており、それにより弁明の仕方が異なってくる。それは自分の関与を否定する場合と、マイナスの出来事自体を否定する場合と、自分の責任を否定する場合の3種類である。マイナスの出来事への関与を否定するのが否認 (例えば、「自分はやっていない」という弁明である。自らの関与は認めるが、その結果がマイナスの出来事ではないことを主張するのが正当化 (例えば「自分の取った行為は正しいものである」という弁明である。マイナスの出来事と自らの関与は認めるが、自分には責任はないとするのが弁解である。(例えば、「確かに迷惑をかけたが、それは自分のせいではない」という弁明である。これらの責任否定の弁明とは反対に、前者の謝罪は、マイナスの出来事の発生を認め、それに対する自らの関与を認め、自分の責任も

* 1 立正大学心理学部教授

* 2 白梅学園短期大学心理学科

認める弁明である。弁明において責任の受容と拒否の次元が重要視されるのは、マイナスの出来事に対して責任があるとみなされると、相手の人からあるいは社会から非難されたり、排除されたり、罰を受けたり、あるいは、賠償を請求される恐れが大きく、自分にとって不利益となるからであり、逆に弁明により周りから責任がないとみなされると、相手の人からあるいは社会から、受容され、理解され、さらには同情さえされることになり、自分にとって利益になるからである。このためマイナスの出来事に対して、責任を受容するか、否定するかはその人の個人的利害と社会的立場に大きな影響を与える。このような論理で考えていくと、人はマイナスの出来事が生じたとき、自分はその出来事には責任がないことを強調した責任否定的弁明を行なうと推論できる。しかし、ここに弁明的自己呈示のパラドックスがある。この点について、大淵・鈴木 (1999) は次のように指摘している。

「人々は、負事象について他者から非難されたり、罰せられることを避けたいと考え (Scott & Lyman, 1968; Schoenbach, 1990; Tedeschi & Riess, 1981)、このため、責任否定的弁明を使用すると予想される (Tedeschi & Norman, 1985; Snyder & Higgins, 1988; Weiner, 1995)。しかし、実際に調べてみると、その予想とは反対に、このような状況で最もよく用いられる弁明は、責任受容的弁明、即ち、謝罪であった (Barnlund & Yoshika, 1990; Gonzales, Manning, & Haugen, 1992; Itoi et al, 1996)。また、奇妙なことに、謝罪こそが非難や罰を避ける最も有効な方法であると人々が信じていることも見いだされた (Gonzales, 1992; McLaughlin, Cody, & O'Hair, 1983; Ohbuchi, Kameda, & Agarie, 1989; Schoenbach, 1990; Takaku, 1998; Weiner, Graham, Peter, & Zmuidinas, 1991)。

Holtgraves (1989) や Weiner (1995) は、不道德の印象を払拭したり、被害者の感情を和らげることを期待して行為者があえて責任受容を表明することがあると指摘した。Itoi et al. (1996) の実験的研究は、日米いずれの弁明者にとっても、最も強い関心は罰の回避ではなく被害者の感情宥和であることを示した。これらの知見や解釈は、弁明が単に責任回避を目指すものではなく、もっと多様な動機や関心によって決定されるものであることを示唆している。」

大淵・鈴木はこのように、謝罪は多様な動機や関心によって決定される、と指摘しているが、本論文のテーマである自己呈示の観点からみると、その主要動機のひとつに印象操作による自己呈示があるといえる。しかし、そう考えると、それではなおさらのこと、自己責任を否定して自己高揚あるいは自己防衛する否定的弁明の自己呈示がとられてしかるべきであろうと推論できる。ただ、それはあまりに短絡的視野での考えで、相手との人間関係を考えた場合、どのような弁明がより良い印象を相手に与え、より良い人間関係が構築されるかを考えてマイナス事象への弁明的自己呈示を選択していくとまったく逆の自己呈示がとられることにもなるのである。対人戦略的印象操作として否定的弁明が最も有効という結論になれば、謝罪的言明をすることにもなるのである。例えば、Fukuno & Ohbuchi (1998) や Ohbuchi, Kameda, & Agarie (1989) において、加害者が責任を認めると被害者の不快感情が和らぎ、また、周囲の人々が謝罪した人に対して好意的印象を持つことが見いだされている。このように相手に与える自分の印象を十分に考慮した上での弁明的自己呈示の選択がなされとなると、一番効果的な弁明は相手の立場を優位にするような自ら責任を引き受けるような弁明、つまり言葉による謝罪的自己呈示を選択する可能性が高くなると予想できる。弁明は、単なる行為者の感情や信念の表明ではなく他者に対する印象を考慮して、意図的にメッセージを組み立てる自己呈示であり、それにより他者の自分に対する印象に影響を与えようとする自己防衛的な試みであると考えることができる。このように考える

と弁明の種類を選択するとき、相手の立場をたてる弁明や相手から受け入れられやすい弁明を考えることになり、このため謝罪的弁明を選択する可能性が高くなると予測することができる。また、別の角度からも謝罪的弁明が相手から受け入れられやすいことが考えられる。人はマイナスの出来事に直面したとき、相手の弁明が戦略的なものではなく真実で心からの弁明であると認知したときにそれを受け入れる傾向がある。弁解がましいとか責任逃れの言い訳と受け取られる弁明は相手に受容されない。一番良いイメージを与える弁明は心の底からの真の謝罪 (Darby & Schlenker, 1989; Wagatsuma & Rossett, 1986) であろう。謝罪は自らの責任を受容することを弁明するため相手は弁明者の謝罪を自己防衛的ではなく自らの信念や感情から生じたと認知しやすい。このため、当事者の印象が良くなり、信頼が増し (Carlston & Shovar, 1983; Snyder & Higgins, 1988; Tetlock, 1980) そのような人とは関係を保とうとするためその人の責任に対して寛容になりやすいといえるのである。Darby & Schlenker (1989) や Ohbuchi & Sato (1994) の研究結果は、このことを実証している。ただし、これを逆の自己呈示と考えると弁明する側が、謝罪を呈示すると他者が戦略的ではなく、心からの弁明であると自分のことを認知しやすく、謝罪的弁明が受け入れられやすいことを知っていて、逆に戦略的に謝罪を使用しているということもできる。このように考えると、謝罪的弁明は心からの弁明であると受け手が抱きやすい方策であり、弁明する側からすれば謝罪的弁明こそ最も有効な戦略的ストラテジーと考えられ、受け手の印象を操作しようとするとき積極的に採用していく自己呈示ということもできる。

ところで、弁明のもうひとつの重要な次元として、マイナスの出来事からの責任の開放があげられる。マイナスの出来事には負の責任が伴うものである。何人かがその出来事に関係し、責任が明確でないときは誰も積極的に責任をとろうとしないし、また、自分に責任が負わされることを危惧する。このようなとき、当事者の一人が、その出来事に自らの責任を表明することは、他の当事者にとっては自分に責任がないことになり、責任追求から自動的にのがれられることになる。ある人が謝罪的弁明をするということは、当人が責任を認めたことを表明していると受け取られることになる。このため、他の人や相手にとって謝罪ほど責任回避上、都合のよい弁明はない。責任を追求される心配や不安がなくなり、自己損失がなくなるからである。しかも、当人が自ら責任を認めることから、自分の方が、対人関係上圧倒的に立場的に優位になる。自己防衛する必要がなくなるばかりか、相対的に自己高揚することにもなる。責任を認めた相手を非難することもできるし、許容することもできる。自分をこのような立場にすることが可能な相手の謝罪的自己呈示は歓迎され、ひいては、その人に良いイメージをもつようになることになる。視点を変えて印象操作をする立場から考えると相手からこのように歓迎され、良い評価を獲得できる自己呈示は対人戦略上多いに利用すべきストラテジーとなるといえる。謝罪的自己呈示は一時的には自己評価を下げるが、人間関係維持という長期的視点からは、自己評価を上げるのに非常に有効な方法と考えられる。このように考えると人間関係に関して日本のように長い付き合いを重視してきた社会においては、このような自己呈示こそが最終的に自己を高揚する呈示方法となるということがいえる。日本の対人関係において印象操作的な言葉による謝罪が多用されることになるのはこのためと推測できる。

実際、欧米の実証的研究においてもマイナスの出来事の弁明において、一見、不利な謝罪が他の弁明よりも選ばれ、また最も適切とみなされることが報告されている (Barnlund & Yoshioka, 1990; Gonzales, Manning, & Haugen, 1992; Ohbuchi, Kameda, & Agarie, 1989; Takaku, 1998; Weiner,

Graham, Peter, & Zmuidinas, 1991) が、それは上記のような理由によると考えられる。

前述したように比較文化的な研究をみていくと、日本では弁明として謝罪が多用されるとされている。Barnlund & Yoshida (1990) は実証研究において日本人の謝罪傾向を確認している。彼らは質問紙を用いて、人はどのような状況のときに謝罪するかを日本人とアメリカ人を対象に調査した。その結果、日本人はアメリカ人なら謝罪しないような状況でも謝罪することが見いだされ謝罪が適当と判断される状況が日本人の場合極めて広範囲であることが分かった。また、Itoi, Ohbuchi, & Fukuno (1996) は日本人とアメリカ人に主人公が、故意ではないが、人に損害を与えてしまう状況を描いた物語を読ませ、被験者が主人公なら謝罪、弁解、正当化、否認のうちどの弁明を行なうかを回答させた。その結果は、日米とも謝罪が最も多く選択された。対人場面においては異なる両文化においても、相手のもつ自分へのイメージをよくするという印象操作の自己呈示が重視されており、これは前述の議論を支持するデータである。このデータの日米を比較すると、日本人はアメリカ人よりも相対的に謝罪を多く選びアメリカ人は日本人よりも正当化を多く選ぶ傾向がみられている。このことから、あらためて、日本人の自己呈示がより長期的な印象操作を画したストラテジーをとっていることを示唆していると推察できる。こうした日本人の謝罪傾向は、比較文化心理学的には集団主義文化の観点から説明されることが多い。Markus & Kitayama (1991) や Triandis (1995) は日本社会は集団主義文化で、そこでは集団成員性や人間関係が個人主義文化の欧米よりもより、重視されるとしている。このため、マイナスの出来事が生じた場合でも人間関係を壊さないように、謝罪することを選択するとされている。大淵 (1999) はこのことを

「日本人は人間関係を大切にするので、相手から反感や不満を持たれないよう、何か不都合があったらすぐに謝ると解釈される。自分の正当性を貫いても、人に疎まれたのでは元も子もないと、日本人は関係優先の判断をする。この点で、個人主義文化の強い欧米人とは謝罪に対する志向性が異なると考えられてきた。」

と説明している。また、大淵と斉藤 (1999) は、親や教師に対して、子供がマイナスの出来事に直面したとき、どのような対処をすすめるかを調査した結果、ここでも謝罪が多いことを見出している。彼らはその理由の一つとして

「日本においては、謝罪という行為自体、好意的に受け止められる傾向がある。謝罪する人は潔いとか誠実であるなど肯定的に評価される。弁明の持つ印象回復効果に関する我々の以前の研究において (Ohbuchi, Kameda, & Agarie, 1989)、弁解や正当化と比較して、謝罪の効果は特に顕著であった。(中略) 謝罪は常に無難である。被害者の怒りを和らげ、被害者が行為者について抱く印象を好意的なものに変化させる効果が期待できる。それ故、誰のせいなのかをいう責任判断は棚上げにして、取りあえず、親や教師は加害者である子どもに謝罪するように指示したのではないと思われる。

日本人が謝罪の印象回復効果を期待する背景には、他の人々から受け入れられること、他の人々の良好な人間関係を維持することなど、集団主義文化の価値観が存在すると仮定されている (Kotani, 1999; Sugimoto, 1999)。他の人々から嫌われたり排斥されることは集団主義文化の人々にとっては重大な脅威である。これを回避するため、時には正義や信条を犠牲にすることがあっても仕方がないとは彼らは考えるのではないか。日本では、事実、正義や公正を口にする人は青臭いとか融通が利かないとして敬遠されたり、社会的に未熟であるとみなされたりする。日本の大人は子どもに対して、問題が起こるとま

ず、謝りなさいと、事実解明よりも関係者の感情宥和を重視した対処を求めることもある。争いを避け、対立の激化を防ぐことを最優先とするこうした日本人の志向性が、本研究に見られた謝罪優位の理由ではないかと思われる。」

としている。このような大淵らの分析からも本論文のテーマである言葉による謝罪的弁明は印象操作のための自己呈示であるという観点が支持されるといえよう。日本人の謝罪は、決してすべてが本心からではなく、むしろ、より多くが相手に好印象を与え、人間関係を良好に保つための表面上の行動と考えられる。もちろん、すべての謝罪的弁明が、本心からではなく、操作的な自己呈示であるというわけではないが、逆にすべての謝罪が本心からであるとはとうてい言えない。特に、日本のような人間関係における和を重視してきた文化においては、確かに言葉上での謝罪は多用されるが、逆にいうと必要以上に多用されるのは、本心からではない印象操作のための謝罪的弁明が対人場面において有効だからとも推論できよう。本研究は、この点を明白にするために内心からの謝罪と表向きの外への発言としての謝罪とを区分できるようにした調査をすることにした。

本研究の調査方法の特徴は次のような点である。まず、謝罪は自己責任の程度と関連すると考えられることから本調査ではマイナス事象の自己責任の程度を次のように3区分し、3段階の場面を設定した。

- (1)損失場面 そのマイナス事象に関して自分には責任がなく他者の責任が明確な場合、つまり自己責任がない状況。
- (2)過失場面 そのマイナス事象に関して自己責任が明確ではない過失的な状況。
- (3)失態場面 そのマイナス事象に関して自己責任が明確で、故意に行ったことが明白で批難あるいは叱責されている状況。

次に、内心と発言を明確に区分するために各被験者に内心はどう思っているか、と実際にどう発言するかを明確に区分させ、記入させるように質問紙を作成した。従来の謝罪研究では謝罪するかどうかは問われているだけのために、それが本心からか、表面上だけなのか、あるいは本心はどう思っているかは問われていない。このため内心と発言の一致不一致が明確ではなかった。本研究の質問紙ではこの点を明確に区分した。これにより、本心からの謝罪か、表向きの印象操作としての謝罪かを知ることが出来ることになる。

以上のことから本研究で次のような仮説を検討していくことにする。

仮説1 謝罪発言は、マイナスの出来事が生じたとしても、どんな状況でも多用されるわけではなく、自分に責任があると思われる程度に応じてより多く使用される。このため(1)マイナスの出来事が他者責任の損失場面では、謝罪発言は少ないであろう。(2)謝罪発言は損失場面よりも自己過失場面のほうが多くなるであろう。また、(3)自己過失場面よりも自己責任の失態場面の方がさらに謝罪発言は多くなるであろう。

仮説2 謝罪発言が印象操作の自己呈示として用いられることがあり、過失場面や自己責任場面において、言葉として相手に謝罪していても内心は謝っていない場合が多くなるであろう。

方 法

被験者 大学生100名

質問紙 修正絵画フラストレーション調査法を用いた。対人関係における損失場面、過失場面、失態場面における内心と発言の相違を調べ、言葉による謝罪の自己呈示とそのときの内心の心理状態について知るため、投影法の性格検査として知られている Rosenzweig. S. の PF スタディ日本語版（住田勝美、林勝造、一谷彊、1964）から題材を得て、以下のような質問紙を作成した。PF スタディは、元来は投影法で、絵画を用いた場面構成で、フラストレーション時における対人的発話を調べ、その反応を分析することから攻撃性の方向と型から、その人の性格を診断する質問紙形式のテストである。このテスト場면을言葉による自己呈示の調査課題として取り上げた理由は、PF スタディに使用されている場面が、いずれも対人関係を扱っていること、日本語版 PF スタディとしての長年の研究データの蓄積があり、分析に信頼がおけること、PF スタディの反応の評点における内責反応等が、本調査での調査目的の謝罪に当たると考えられること、投影法であるため、被験者が構えた回答ではなく、本心からの回答が得られやすいと考えられること、回答が、発言を求めているので、言葉による自己呈示の研究に適合すること、フラストレーション場面のような状況が、自己呈示の仕方に大きな影響を与えられ、内心と発言の差異を検討するのに適していること、その内心と発言の差異を調査しやすいこと、自我阻害場面と超自我阻害場面があり、それが、損失場面、過失場面、自己責任場面と読み替えることができ、三者を比較することができること、回答者が興味を持ちやすく、回答しやすいと考えられる課題であることなどである。

日本版 PF スタディは成人版24場面児童版24場面から構成されているが、本調査では児童版の質問紙の24場面の中から以下に示すような6場面を課題として選んだ。使用した場面は自我阻害場面の1, 9, 11, 24の4場面と超自我阻害場面の7と13の2場面の6場面である。児童用を利用したのは、大学生にも中学生（中学生のデータは紙面の都合上今回はふれてない。）にも同一の課題を課することができること、また、場面上の対人関係が親子関係などかなり明確になっているため、本実験目的により適当であると判断したからである。自我阻害場面の1と9は相手の作為により何らかの損失を被ったという場面と考えられ他者責任が明確な損失場面とした。自我阻害場面の11と24は、自分の過失を責められている場面と考えられ自己過失場面とした。超自我阻害場面の2つは悪いことが見つかり、それを相手から批難されているという場面と考えられ、自己責任の失態場面とした。各場面上の発話者の言葉は次の通りである。

- 1 (PF 原本の場面1) おかしは にいさんに あげたから もう ひとつもありませんよ。
- 2 (PF 原本の場面9) ぼくがかったよ。これは みな ぼくのものだ。
- 3 (PF 原本の場面11) しずかに しないか。おかあさんは ねむたいんだよ。
- 4 (PF 原本の場面24) てがきたないね。ほんを だすときには あらってください。
- 5 (PF 原本の場面7) あなたは わるいこね。うちの はなを つんだりして。
- 6 (PF 原本の場面13) こんどこそ とっている ところを つかまえたぞ。

質問紙には、この1から6の6場面の各々について、次のような内心と発言の2つのタイプの問が設

定されている。

内心 このように言われて、この子供は、どう思うでしょうか。書いてください。

発言 このように言われて、この子供はその人に対して、どう答えたでしょうか。書いてください。

答えはオープンアンサーで、質問紙の中にある空欄の吹きだしに自由に記述するように記されており、また、教示でそのように説明がなされる。

手続き 大学生は、大学の一般教育科目の授業内において質問紙を配布、説明後、回答させ、後に回収した。

分析 まず被調査者の回答を、住田勝美、林勝造、一谷彊（1964）の日本版 PF スタディ児童用使用手引きの評点因子の評点法に基づき、分類した。

各場面別個人別に被調査者の回答を内心と発言それぞれについて分析し、集計する。その結果を基に、内心と発言の内容を比較し、また、内心と発言間の内容の変化を分析する。次に、PF スタディの I 反応と i 反応を謝罪反応と解釈して、I + i の合計を謝罪反応数としそれ以外の反応をその他の反応として分類して、各場面における謝罪反応数とその他の反応数を比較して、それぞれの内心、発言数および内心、発言間の変化を統計的に分析する。（謝罪数の比較の検定は被験者をランダムに二分して、対応のない²自乗検定を行い、内心発言間の変化は対応のある³自乗検定をおこなった。）

結 果

本研究の主たる目的は、言葉による謝罪の自己呈示についてであるがここではまず PF スタディのオリジナル採点法に基づいた結果から見ていくことにする。

1. PF スタディのオリジナル評点の傾向

大学生のデータの 6 場面各々の内心と発言の結果は表 1 に示されている。この結果をまず Rosenzweig の PF スタディ日本版（住田勝美、林勝造、一谷彊 1978）のオリジナルの評点法に沿って回答内容の攻撃の方向と型の特徴をみていく。

1) 場面 1 場面 1 は Rosenzweig の言う人為的自己阻害場面で、いわば他者責任が明確な損失場面である。このような対人場面においては内心、発言とも、外責反応が極めて多く、内心の 98.0%、発言の 81.0% が外責反応であることが示されている。ただし、無責反応は内心では 1.0% とほとんどみられないが発言では 17.0% と比較的多く見られ、発言においては、外責反応が抑えられた分、無責反応が生じたとも考えられる。これは発言時には印象操作上、攻撃的行動が抑制されることをうかがわせる結果である。

2) 場面 2 場面 2 も人為的自己阻害場面であるが他者責任は明確でない損失場面である。この対人場面においても内心、発言ともに外責反応が極めて多く、内心の 86.5%、発言の 71.0% 外責反応である。

3) 場面 3 場面 3 は、Rosenzweig の分類では人為的自己阻害場面であるが、前述したように過失的場面である。この対人場面においては内心、発言とも、内責 - 自我防衛の自責反応が最も多く、内心の 37.5%、発言の 49.0% が自責反応である。この内責 自我防衛反応は本論文でテーマとしている謝罪

表1 PFスタディの評点法により6場面の反応率(大学生n=100)

場面1

内 心

	障害優位	自我防衛	要求固執	小 計
外 責	52.0	37.0	9.0	98.0
内 責	0.0	0.0	1.0	1.0
無 責	0.0	1.0	0.0	1.0
小 計	52.0	38.0	10.0	100.0

発 言

	障害優位	自我防衛	要求固執	小 計
外 責	32.0	30.0	19.0	81.0
内 責	0.0	0.0	2.0	2.0
無 責	0.0	14.0	3.0	17.0
小 計	32.0	44.0	24.0	100.0

場面2

内 心

	障害優位	自我防衛	要求固執	小 計
外 責	22.5	35.0	29.0	86.5
内 責	0.5	7.0	0.0	7.5
無 責	0.5	3.0	2.5	6.0
小 計	23.5	45.0	31.5	100.0

発 言

	障害優位	自我防衛	要求固執	小 計
外 責	10.5	17.5	43.0	71.0
内 責	0.5	11.5	0.0	12.0
無 責	1.5	15.0	0.5	17.0
小 計	12.5	44.0	43.5	100.0

場面3

内 心

	障害優位	自我防衛	要求固執	小 計
外 責	5.5	17.5	5.5	28.5
内 責	8.0	37.5	0.0	45.5
無 責	0.0	0.5	25.5	26.0
小 計	13.5	55.5	31.0	100.0

発 言

	障害優位	自我防衛	要求固執	小 計
外 責	0.0	9.0	4.5	13.5
内 責	0.0	49.0	3.0	52.0
無 責	0.0	0.5	34.0	34.5
小 計	0.0	58.5	41.5	100.0

場面4

内 心

	障害優位	自我防衛	要求固執	小 計
外 責	10.5	26.0	0.0	36.5
内 責	1.0	21.0	6.0	28.0
無 責	0.0	0.0	35.5	35.5
小 計	11.5	47.0	41.5	100.0

発 言

	障害優位	自我防衛	要求固執	小 計
外 責	3.0	4.0	0.5	7.5
内 責	0.0	30.5	7.0	37.5
無 責	0.0	0.0	55.0	55.0
小 計	3.0	34.5	62.5	100.0

場面5

内 心

	障害優位	自我防衛	要求固執	小 計
外 責	5.0	35.0	1.0	41.0
内 責	15.0	44.0	0.0	59.0
無 責	0.0	0.0	0.0	0.0
小 計	20.0	79.0	1.0	100.0

発 言

	障害優位	自我防衛	要求固執	小 計
外 責	1.5	11.0	2.5	15.0
内 責	1.0	83.0	1.0	85.0
無 責	0.0	0.0	0.0	0.0
小 計	2.5	94.0	3.5	100.0

場面6

内 心

	障害優位	自我防衛	要求固執	小 計
外 責	51.0	25.5	5.0	81.5
内 責	1.0	17.5	0.0	18.5
無 責	0.0	0.0	0.0	0.0
小 計	52.0	43.0	5.0	100.0

発 言

	障害優位	自我防衛	要求固執	小 計
外 責	2.0	13.5	2.0	17.5
内 責	0.0	59.5	23.0	82.5
無 責	0.0	0.0	0.0	0.0
小 計	2.0	73.0	25.0	100.0

反応の一つである。自責反応に次いで多い反応は、内心、発言ともに無責 要求固執の慣習服従反応で、内心の25.5%、発言の34.0%である。これはいわば相手の叱責を了解する反応であり、謝罪反応に近似する反応といえよう。

この対人場面における内心と発言の反応を比較すると外責反応に差があることが分かる。内心の外責反応は28.5%であるのに対して発言の外責反応は13.5%で、内心の方が外責反応が多いことが示されている。これは発言時に印象操作のため外責反応が抑制されることをうかがわせる結果である。

4) 場面4 場面4は、場面3同様、人為的自己阻害場面であり、過失叱責場面である。この対人場面においては、内心、発言ともに無責 要求固執の慣習服従反応が最も多く、内心において35.5%、発言において55.5%であった。この反応は前述したように了解という反応であり、謝罪反応に近似する反応といえよう。二番目に多い反応は内心と発言で異なっている。内心では外責反応が38.0%であるのに対し、発言では外責反応は7.5%で内責反応が37.5%である。内心では二番目に多い反応は外責 自我防衛つまり攻撃反応が26.0%であるのに対し、発言では内心 自我防衛の自責反応、つまり謝罪が30.5%で多くなっている。内心と発言で外責と内責が逆転していることが示されており、発言時に印象操作が図られていることをうかがわせる結果といえよう。

5) 場面5 場面5はRosenzweigの分類での超自我阻害場面で他者から自己責任を叱責される失態場面である。この対人場面では内心、発言ともに内責が最も多く、内心の内責反応が59.0%、発言の内責反応は85.0%である。ただ、内心と発言の内責反応を比較すると発言の方がかなり多く、また内責 自己防衛つまり自責反応はともに一番多い反応ではあるが、内心は44.0%、発言は83.0%と発言の自責反応がかなり多いことが示されている。他方、内心では、外責 自己防衛の攻撃反応が35.0%と発言の攻撃反応11.0%に比較してかなり多い。発言時に攻撃反応が印象操作のため抑制されていることをうかがわせる結果といえよう。

6) 場面6 場面6も超自我阻害場面で他者から自己責任を叱責されている失態場面である。この対人場面では、内心においては外責が81.5%と極めて多く、発言においては内責が82.5%と極めて多く、内心と発言では外責反応と内責反応が対照的に多くみられている。また、内心においては外責 障害優位の障害強調反応が51.0%と最も多く、発言では内責 自己防衛の自責反応が59.5%と最も多くなっている。この結果は、発言時に印象操作のために外責反応が抑制され、内責反応が促進されることを示唆しているといえよう。

2. 謝罪反応

PF スタディのオリジナル評点法を本研究のテーマである謝罪表現という点から検討すると、内責 自我防衛の自責反応が典型的な謝罪反応といえるが、同時に内責 要求固執の努力反応も謝罪的反応といえよう。そこで、ここでは前述したように内責 自我防衛と内責 要求固執を加えた反応数を謝罪的反応数として捉えることにした。組み合わせ評点に内責 - 自我防衛あるいは内責 要求固執が含まれている場合、1とカウントした。表2は6場面各々の反応を謝罪反応とそれ以外の反応として分けて整理した表である。この表に沿って、各場面ごとの謝罪反応の結果をみていく。

1) 場面1 場面1の自我阻害の損失場面では、謝罪反応は極めてわずかで内心で1.0%、発言2.0%であった。このような他者責任の損失場面においては、日本人被験者は、謝罪的弁明は少ないという結

表 2 各場面ごとの内心と発言の謝罪反応率 大学生 (n = 100)

場面 1				場面 4			
	内 心	発 言	計		内 心	発 言	計
謝 罪	1.0	2.0	3.0	謝 罪	27.0	38.0	65.0
その他	99.0	98.0	197.0	その他	73.0	62.0	135.0
計	100.0	100.0	200.0	計	100.0	100.0	200.0

場面 2				場面 5			
	内 心	発 言	計		内 心	発 言	計
謝 罪	7.0	12.0	19.0	謝 罪	44.0	84.0	128.0
その他	93.0	88.0	181.0	その他	56.0	16.0	72.0
計	100.0	100.0	200.0	計	100.0	100.0	200.0

場面 3				場面 6			
	内 心	発 言	計		内 心	発 言	計
謝 罪	38.0	52.0	90.0	謝 罪	18.0	83.0	101.0
その他	62.0	48.0	110.0	その他	82.0	17.0	99.0
計	100.0	100.0	200.0	計	100.0	100.0	200.0

果が得られた。対人場面において日本人はすぐに謝罪するといわれているが、実際には状況により謝罪しないことが明らかにされている。

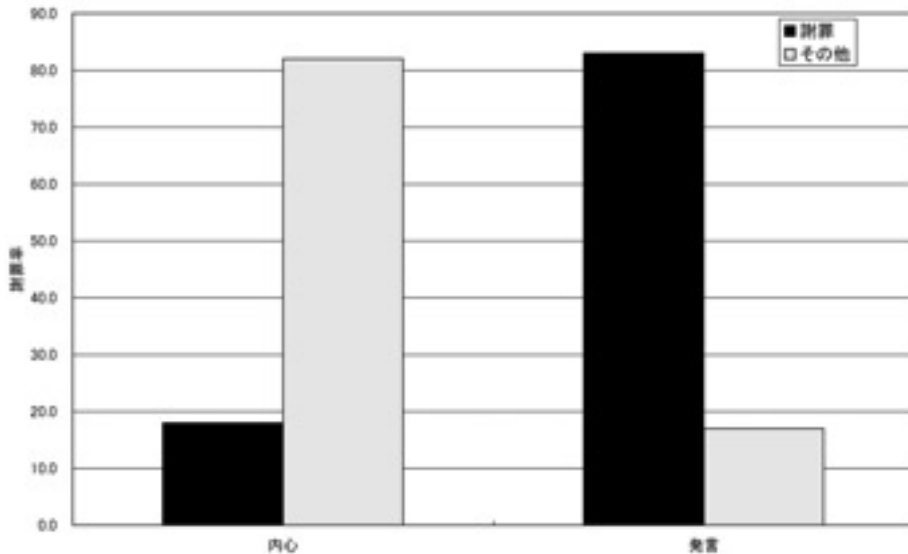
2) 場面 2 場面 2 の自我阻害の損失場面でも謝罪反応はわずかで内心で7.0%、発言で12.0%であった。このような他者責任の損失場面においては、日本人被験者は、謝罪的弁明は少ないという結果が得られた。場面 1 と場面 2 の結果から、マイナスの出来事であっても、他者責任が明確な損失場面においては、日本人はほとんど謝罪しないことがあきらかにされたといえる。これにより、仮説 1 の(1)は支持されたといえよう。

3) 場面 3 場面 3 の自我阻害場面の自己過失場面では、謝罪反応が内心では38.0%で、発言では半数を超え、52.0%になっている。このような自己過失場面においては、日本人被験者は、内心発言ともかなりの謝罪的弁明がなされることが結果として得られた。場面 2 と場面 3 との内心謝罪反応の比較は $\chi^2=16.83$, $df=1$, $p<0.01$ 、同様に、発言の謝罪比較は $\chi^2=26.81$, $df=1$, $p<0.01$ で、統計上で有意な差が認められている。これは仮説 1 の(2)を支持する結果といえよう。さらに内心に比較して、発言での謝罪が多いこと ($\chi^2=9.03$, $df=1$, $p<0.01$) は印象操作のための弁明が働いていることを示唆し、仮説 2 を支持しているといえよう。

4) 場面 4 場面 4 も自我阻害の自己過失場面であり、内心の27.0%、発言の38.0%が謝罪反応を示している。ここでも損失場面よりも謝罪反応が多く仮説 1 の(2)を支持する結果といえよう。場面 2 と場面 4 との内心謝罪反応の比較は $\chi^2=5.74$, $df=1$, $p<0.05$ 、同様に、発言の謝罪比較は $\chi^2=12.69$, $df=1$, $p<0.01$ で、統計上有意な差が認められている。

5) 場面 5 場面 5 は、超自我阻害の自己責任の失態叱責場面である。この場面において 6 場面中トータルで64.0%と一番謝罪反応が多い。損失場面や過失場面に比較して謝罪反応が多い。このことは仮説 1 の(3)を支持している結果といえよう。また、内心の謝罪反応は44.0%と他の場面と比較して多く、さらに発言の謝罪反応は84.0%で 6 場面中、最も多い。場面 2 と場面 5 との内心謝罪反応の比較は

図1 失態場面（場面6）における内心と発言の謝罪率の比較



$\chi^2=14.03$, $df=1$, $p<0.01$ 、同様に、発言の謝罪比較は $\chi^2=44.00$, $df=1$, $p<0.01$ で、統計上有意味な差が認められている。このような自己責任の失態場面においては、日本人被験者は、大半の人が、発言上は、謝罪的弁明をするという結果が得られた。しかし、言葉で謝罪的弁明をしている人のうち、内心で謝罪している人はその内のおおよそ半数であるという結果が得られた。このため、過失場面との比較において内心の謝罪反応数では差はなく、発言の比較においては大きな差が生じるという結果を生んでいる。場面3と場面5との内心謝罪反応の比較は統計的に有意差が無いのに対し、発言の謝罪比較は $\chi^2=13.50$, $df=1$, $p<0.01$ で、統計上有意味な差が認められている。これは、失態時において特に内心と発言の間に著しい不一致があることを示しており、印象操作のために謝罪的弁明がなされていることを示唆する結果といえよう。この結果は仮説2を支持しているといえよう。

6) 場面6 場面6も超自我阻害の自己責任の失態叱責場面で謝罪反応はトータルで50.0%と多い。ただこの場面での謝罪反応は内心と発言の差異が大きく、図1に示されるように内心では18.0%の謝罪反応であるが、発言では83.0%が謝罪反応を示している。このような自己責任の失態場面においては大半の人が発言上、謝罪的弁明をするが、しかし、内心では場面、状況により過失場面よりも謝罪している人が多いというわけではないという結果が得られた。場面2と場面6との内心謝罪反応の比較は $\chi^2=3.84$, $df=1$, $p<0.05$ 、同様に、発言の謝罪比較は $\chi^2=57.76$, $df=1$, $p<0.01$ で、統計上有意味な差が認められている。場面3と場面6との内心謝罪反応数に統計的に有意な差はない。他方、発言の謝罪比較は $\chi^2=23.25$, $df=1$, $p<0.01$ で、統計上有意味な差が認められている。このため、仮説1の③は部分的にのみ支持されているといえよう。このことは失態時の謝罪的弁明において、内心と異なる発言をしていることを示唆しており、印象操作による自己呈示であることを強く示唆する結果といえよう。この結果は仮説2を強く支持する結果であるといえよう。

3 内心と発言の個人内差異と変化

ここまで1、2で示したデータは、被験者全員のデータをトータルで分析した結果である。被験者全体の内心反応の内容と被験者全体の発言反応の内容の量的比較である。このデータにより、内心と発言の謝罪の全体的傾向は把握できたといえる。しかし、本研究の主目的は、内心と発言の差異と変化を知ることにあるので、より直接的なデータとしては、同一個人内の内心と発言がどのように変化し、変化するかを検討する必要がある。そこでここでは、最も内心と発言の差異の大きかった超自我阻害場面、つまり自己責任の失態場面における各個人の内心と発言の反応の変化を分析した。

データに沿って内心反応が10以上あるセルをピックアップして主な変化傾向をみると、次のような結果が得られた。

- 1、内心で外責自我防衛反応をしている人のうち、場面5で68.6%、場面6で60.8%の人が発言では内責自我防衛反応に変化している。
- 2、場面5の内心で内責障害優位反応をしている人のうち、97.4%が発言では内責自我防衛反応に変化している。
- 3、場面6の内心で外責障害優位反応の59.8%の人が発言は内責自我防衛反応に変化している。また、23.8%の人が内責要求固執反応に変化している。
- 4、内心で内責自我防衛反応をしている人のうち、場面5で93.2%、場面6で60.0%の人が発言でも内責自我防衛反応をしている。場面6で内責自我防衛反応をしている人のうち、34.3%は発言で内責要求固執に変化している。

これらの結果から、内心で外責反応をした人の多くが発言では内責反応に変化していることが示された。

次に、この個人内の変化データを謝罪的反応とそれ以外の反応に区分して、謝罪傾向の内心と発言の差を個人内の変化としてとらえていくことにする。ここでは前述したようにPFスタディの内責自我防衛反応と内責要求固執反応を謝罪的反応とし、それ以外をその他の反応として分析した。表3に場面5と場面6における内心と発言の変化を示してある。

その結果、次のような内心と発言の差異と変化を知ることができる。

- 1) 内心で謝罪反応をした人のうち、場面5で93.1%、場面6で94.4%の人が発言においても謝罪的反応をしていて、内心の謝罪は発言の時もそのまま維持されることが示されている。
- 2) 内心で謝罪以外の反応をした人のうち、場面5で76.8%、場面6で80.0%の人が発言では謝罪的反応をしている。内心では謝罪をしていない多くの人が発言では謝罪的反応していることが明らかにされている。これらの変化の場面5は $\chi^2=48.56$, $df=1$, $p<0.01$, 場面6は $\chi^2=37.48$, $df=1$, $p<0.01$ で統計的にも有意な差が認められている。このことは発言時に印象操作がなされ、謝罪的弁明がストラテジーとしてとられていることを示唆しているといえよう。

表3 失態場面における発言時、内心からの変化数

場面 5				場面 6			
内 心		発 言		内 心		発 言	
		変 化				変 化	
	謝 罪	3	41		謝 罪	1	17
	その他	43	13		その他	66	16

考 察

「日本人が社会的葛藤や紛争場面においてすぐに謝ること、つまり、日本人の謝罪傾向は国際的にもよく知られている」(大淵1999)とされる。実際最近ではアメリカの社会心理学のテキストなどに日本の経営者が倒産したときの会見で深々と顔を下げ泣きながら謝っている写真などが掲載されている。ことあるごとに、すいません、ごめんなさいを連発し、ペコペコ頭を下げる姿は、外国人の目には奇妙に映るのであろう。データ面でも「日本人はアメリカ人よりも一般的に謝罪を好む」(大淵1999)ことが実証されている。こうした日本人の謝罪傾向は、集団主義文化の観点から「日本人は人間関係を大切にするので、相手からの反発や批難を持たれないよう、何か不都合があったらすぐに謝ると解釈される」(大淵1999)という。このように考えると、日本人の謝罪は、自分の非を認める心からの謝罪の気持ちの表現ではなく、人間関係を良好に保つための対人ストラテジーとしての謝罪であり、相手に対する自分の印象を操作するための自己呈示の部分が大きいことになる。また人々は、謝罪が批難や叱責を避ける最も有効な方法と考えている(大淵1999)とされているが、このように日本人の謝罪傾向が高いのは、自己呈示理論から推察すると日本の人間関係では特にこの方法が効果的であり、また日本人がそのことをよく知っていて、これを多用していると考えられる。このことは日本における謝罪を社会心理学的に研究していくときには、特に印象操作としての謝罪を注視しなければならないといえる。対人場面において、表面上に表される謝罪の言葉をそのときの内心の本当の気持ちと区分し、対照させて研究していくことが大事ではないかと思われる。そこで本研究では、どのような事態で、謝罪が生じやすいかを調査することに加えて、どのような事態で謝罪の言葉が表に言明されやすいかを調べ、同時に謝罪の言葉が呈示されたとき、それは本人が内心の気持ちから謝罪しているか、それとも単に印象操作のための表面上の自己呈示なのかを調べるために、謝罪の表明と本心との相違を調べ、そこに相違があるとしたら、どのような違いがあるのかを調べることにした。これらを区分できる質問紙を作成して調査することにより、印象操作のための自己呈示としての謝罪について明らかにすることを目的とし調査を行った。以下、結果に示したデータをもとに仮説を考察していく。

まず、仮説1の他者責任の(2)損失場面よりも自己過失場面のほうが謝罪発言が多く、(3)自己過失状況よりも自己責任の失態状況のほうが、さらに謝罪発言が多くなる、については、結果に示したように、発言時の謝罪にはこの傾向が明確に見られ、仮説1は支持されたといえよう。日本人は、すぐに謝るといわれているが、データが示すように、どんなマイナス状況でもすぐに謝るわけではなく、他者責任の明確な過失場面の場面1や場面2においては、謝罪の言葉はほとんど発せられないことが明示され、仮説1の(1)も支持されている。またこのようなケースにおいては心の中でも謝罪の気持ちはほとんどないことも明示されている。逆にそのような場面ではその損失に責任をもつ他者を批難し、攻撃する気持ち(内心)が最も多くみられ、また言葉でも表明されている。他者責任の損失を被った場面は、当然のことではあるが自己卑下傾向や謙譲的傾向が強いとされている日本人においても自責の念、謝罪の気持ちをもつのではなく、相手を批難し、相手に責任をとらせるようにする傾向が強く、それを言明する傾向も強いが実証されたといえる。

一方、自分の過失で相手に迷惑をかけた場合、それが過失であっても批難あるいは叱責された場合、その過失の程度にもよるが、かなり多くの人が相手に謝罪の言葉を発し、また、心の中でもその過失で

相手に迷惑をかけたと思い、内心、謝罪の気持ちをもつことが調査データに示されている。場面3と場面4は自分の過失により相手に迷惑をかけた場面である。このような場合、結果に示されたように他者責任が明確な損失場面とは異なり、過失といえども自分が関係していることには間違いないので、相手に謝罪し、また心の中でも謝罪している。ただし、日本人は謝罪が多いという視点で見直すと、この場面3、4の謝罪の反応数の結果は、それほど謝罪が多くないと受け止められるかもしれない。そこで、データを Rozenzweig の PF スタディ日本版のオリジナルの評点に戻って、検討すると、場面3、4の場合、反応として無責 要求固執に分類される反応が多いことが分かる。この反応は、慣習服従といわれているが具体的な言葉の典型は、「わかりました」であり、了解、了承を表す言葉であり、前述したように謝罪反応と同じ方向にある謝罪に近似の対応である。そこで、内責の謝罪とこの無責 要求固執の了解を含めて受容的反応とするならば、その反応は場面3、4ともに内心で約70%を超え、発言では約90%を占めることになる。このことから自己過失を叱責された場合、大半の場合、謝罪する方向にあり、少なくとも過失責任を認める方向の発言をし、また内心でもそう思っていることが実証されたといえる。このように過失場面の結果を広くとらえると日本人は謝罪傾向が高いという従来の知見を支持する傾向があるといえるのである。次に、自分が失態を犯したことを他者から批難あるいは叱責された場合の謝罪傾向について検討していく。自分が承知で悪いことをするなどの失態が発覚し、批難・叱責された場合、謝罪するか、開き直るかであるが、結果に示されるように大半が謝罪発言をする傾向にあることが示されたといえる。場面5と6はそのような自己責任の失態叱責場面である。このような場面では発言上は80%以上は謝罪的弁明をすることが実証されている。自分に責任があるときは、率先して自分から謝罪することが多いことを示している。

さて、ここまでの考察で仮説1が一部を除き支持されたといえよう。PF スタディという自我阻害場面よりも超自我阻害場面の方が謝罪発言が多い。また、本研究の分類での自己責任の程度の違いにより、損失場面よりも過失場面の方が謝罪発言が多く、またそれよりも失態場面の方が謝罪発言が多いという傾向が明白にみられたといえる。しかし、場面6に典型的に示されているように、発言上、謝罪を表現している一方で、内心では謝罪していない人が多くみられた。このことは、仮説1の(3)を部分的にのみ支持する結果になっているが、そのことが日本人の謝罪言葉の多くが印象操作のための自己呈示であるという仮説2の支持を強く示唆しているといえよう。次に仮説2について考察していく。

印象操作としての謝罪的自己呈示の典型は、発言と内心が異なり、相手の人の前での発言は謝罪的であるが、内心は謝罪していない場合である。謝罪の言葉を口にしながら、内心の気持ちは、内責的ではなく、むしろ外責的で攻撃的である場合がある。このような発言と内心の典型的逆転は、自己責任が少ない過失場面に多くみられるとも考えられるが、調査の結果は、過失場面よりも失態場面において、より典型的にみられた。自らの失態を批難され、叱責されたとき、人は心の中から反省し、謝罪するはずであるし、道徳的、倫理的観点に立てば、そうすべきであるといえる。が、しかし実際には、人はそれほど道徳的でも論理的でもないことが示唆される。残念ながら実際は、表面上、あるいは言葉の上では深く謝罪しながら心の中では苦々しく思っている場合があるということをこの調査データは示している。このデータはこれまで日本人の特徴であるとされてきた謝罪傾向は、日本人は心の中から謝罪傾向が強いのではなく、実は対人場面での印象操作として言葉による謝罪的発言をすることが多いことを明らかにしている。むしろ日本人の謝罪傾向の高さは、それがそのまま内心の発露ではなく対人関係を重

視し、相手に嫌われないように、相手に怒られないように表面上とにかく謝罪して自分の方が社会的関係で低いことを示すという印象操作の方法として謝罪が多用されていることが実証的に裏づけられたといえよう。過失場面と失態場面においては内心の謝罪よりも謝罪発言が非常に多いというデータや謝罪発言をしたかなりの人が内心時では謝罪していないというデータから仮説2は支持されたと考えることができる。このように印象操作の自己呈示としての謝罪は発言上は謝罪するが、内心は謝罪する気持ちはもっていないため、内心と言行の不一致を生むことになり、タメエとホンネを使い分ける日本文化を熟成させているといえよう。日本の社会においてはこの不一致が人間関係を良好に保ち、印象操作の自己呈示に役立っており内心と不一致の言行をすることで、それがいわば人間関係の潤滑油となっていると考えることができる。そうであるならば、人と人の関係により気を使い、和を大切に日本の人間関係においては内心と言行の不一致が多くなることはそれを文化として理解できる。ただし、蛇足ながら、最近の日本の場合、そうして気を使い、それを必要悪として必要以上に、内心と不一致の言動を表に出すことにより、新たな矛盾が摩擦を生むことになり、ますます人間関係を複雑にしているのも確かのように思える。

言行不一致や印象形成の自己呈示はどの文化の人間関係でもみられることであるが、日本の人間関係においては和の人間関係があまりに強調されすぎ、“場”を大事にすることから（中根千枝1960）その場の印象に気を使いすぎ、言行不一致行動をしすぎて、返って人間関係を疑心暗鬼なものにしているきらいがあると思われる。今後、このような調査を他の文化でも行い、言語比較文化心理学的研究を進めることにより、この点はさらに解明されていくことが期待できる。

文 献

- Barnlund, D., & Yoshioka, M. (1990). Apologies: Japanese and American styles. *International Journal of Intercultural Relations*, 14, 193-206.
- Carlston, D. E. & Shovar, N. (1983). The effects of performance attributions on others' perception of the attributor. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 515-525.
- Darby, B. W. & Schlenker, B. R. (1989). Children's reactions to transgressions: Effects of the actor's apology, reputation, and remorse. *British Journal of Social Psychology*, 44, 353-364.
- Gonzales, M. H. (1992). A thousand pardons: The effectiveness of social recovery tactics during account episodes. *Journal of Language and Social Psychology*, 11, 133-151.
- Fukuno, M. & Ohbuchi, K. (1998). Effectiveness of accounts as victim's reactions to them: Severity of harms, closeness of relationships, and culture. *Asian Journal of Social Psychology*, 1, 167-178.
- Gonzales, M. H., Manning, D. J., & Haugen, J. A. (1992). Explaining our sins: Factors influencing offender accounts and anticipated victim responses. *Journal of Personality and Social Psychology*, 8, 1-16.
- Itoi, R., Ohbuchi, K., & Fukuno, M. (1996). A Cross-Cultural Study of Preference of Account: Relationship Closeness, Harm Severity, and Motives of Account Making. *Journal of Applied Social Psychology*, 26, 913-934.
- Kotani, M. (1999). A discourse analytic approach to the study of Japanese apology: The “feel-

- good" apology as a culture category. In N. Sugimoto (Ed.), *Japanese apology across disciplines* (pp. 125-154). Commack, Nova Science Publishers.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self : Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 24-253.
- McLaughlin, M. L., Cody, M. J., & O'Hair, H. D. (1983). The management of failure events : Some contextual determinants of accounting behavior. *Human Communication Research*, 9, 208-224.
- 中根千枝 (1967) タテ社会の人間関係, 講談社.
- Ohbuchi, K., Kameda, M., & Agarie, N. (1989). Apology as Aggression Control : Its Role in Mediating Appraisal of and Response to Harm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 219-227.
- 大淵憲一 (1999) 日本人の謝罪傾向の起源 比較文化的発達研究 , 平成 8 年度稲盛財団助成金研究報告書, 1-46.
- 大淵憲一・齋藤麻貴子 (1999) 親と教師による子どもの弁明指導の研究 : 日本人の弁明使用の特徴と状況要因, 平成 8 年度稲盛財団助成金研究報告書, 65-92.
- 大淵憲一・鈴木麻里子 (1999) 弁明選択過程に関する日米比較研究 : 状況要因と媒介変数の検討, 平成 8 年度稲盛財団助成金研究報告書,
- 齊藤勇・荻野七重 (2002) 自己呈示としての謝罪言葉 - 日本人は本心から謝っているか - , 日本社会心理学会第43回大会論文集.
- Schlenker, B. R. (1980). *Impression management : The self concept, social identity, and interpersonal relations*. Brooks-Cole.
- Scott, M. B. & Lyman, S. m. (1968). Accounts. *American Sociological Review*, 33, 46-62.
- Schoenbach, P. (1990). *Account episodes : The management and escalation of conflict*. Cambridge University Press.
- Snyder, C. R. & Higgins, R. L. (1988). Excuse attributions : Do they work? In S. L. Zelen (Ed.), *Self-presentation : The second attribution-personality theory conference, CSPP-LA*, 1986 (pp. 52-132), Springer-Verlag.
- Sugimoto, N. (1999). Norms of apology depicted in U. S. American and Japanese literature on manners and etiquette. In N. Sugimoto (Ed.), *Japanese apology across disciplines* (pp. 47-78), Nova Science Publishers.
- 住田勝美・林勝造・一谷彊 (1964) ローゼンツアイク人格理論 三京房.
- 住田勝美・林勝造・一谷彊 (1961) 改訂 PF 版スタディ使用手引 三京房.
- Takaku, S. (1998). *Culture and states as influence on account-giving : A comparison between the U. S. A. and Japan*. Unpublished manuscript.
- Tedeschi, J. T. & Norman, N. (1985). Social power, self-presentation, and the self. In B. R. Schlenker (Ed.), *The self and social life* (pp. 293-309), Academic press.
- Tedeschi, J. T., & Riess, M. (1981). Verbal tactics of impression management. In C. Antaki (Ed.), *Ordinary Language Explanations of social behavior* (pp. 3-22), Academic Press.

- Tetlock, P. E. (1980). Explaining teacher explanations of pupil performance : A self-presentation interpretation. *Social Psychology Quarterly*, 3, 283-290.
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism and collectivism*. Westview.
- Wagatsuma, H. & Rossett, A. (1986). The implications of apology : Law and culture in Japan and the United States. *Law and Society Review*, 20, 461-498.
- Weiner, B. (1995). *Judgment of responsibility*. Guilford.
- Weiner, B., Graham, S., Peter, O., & Zmuidinas, M. (1991). Public confession and forgiveness. *Journal of Personality*, 59, 281-312.

(本論文の一部は日本社会心理学会第43回大会において発表されている。また、本研究にあたり、データの集収、分析等に野島文氏の協力を得ている。記して感謝したい。)